

No.17 March, 2016

COMMENTS ON BECOMING NEXT PRESIDENT OF THE IRIS MURDOCH SOCIETY OF JAPAN

Paul Hullah

The paths down which our lives will lead us are so often unexpected. As I look forward nervously and humbly, yet with a certain quiet pride, to assuming presidency of the Iris Murdoch Society of Japan (taking over from the venerable Professor Shioda, who has kept a calm and steady hand on the rudder and to whom I am sure we all offer our warmest thanks), I ponder and wonder how this curious but welcome state of affairs came about.

It surely wasn't meant to be like this. Nor did I (so far as I recall) actively invite this pleasant scenario into my professional life: a life that seems to career around like a pinball in a pinball machine, even now, despite my best attempts to go in a straight and self-decreed line. Poetry (an oeuvre for which Murdoch, though she dabbled in it, is least well known), and not the novel, was always my chosen lamp and my lantern. In 1984, at Edinburgh University, in my final undergraduate year (before I embarked on a PhD in, yes, The Poetry of Christina Rossetti), I took a course in 'Twentieth Century Literature' (because I wanted to study Philip Larkin more closely) of which a single Murdoch novel (Under The Net) was an 'optional' component of a depressingly heavy reading list. I didn't read it. A fellow student (it might well have been Ian Rankin, who, years later, would himself become an award-winning crime writer, and who remains my close friend) told me Murdoch was 'middle class people sitting around dinner tables talking about Plato'. (To an extent, this may indeed be true, but so what?) This dismissive opinion was confirmed by friends, including a quiet man who sporadically turned up and slept on the sofa in the apartment I shared with five other students. His name was Irvine Welsh. A decade later, he wrote the best-seller Trainspotting, a novel arguably just as significant and influential as Murdoch's best (The Sea, The Sea would get my vote) and, arguably and ironically just as 'narrow' in its social vision (working-class heroin addicts instead of middle-class philosophers). Irvine also remains my friend, and I have just about convinced him (and Ian) to revise their views of Murdoch.

Meanwhile, back at my narrative... Having completed my PhD, I arrived in Japan in 1992 to work as Foreign Professor in the Faculty of Letters at Okayama University, and found myself immediately under the caring, protective wing of my great mentor-friend and our society's mainstay, Professor Yozo Muroya, Japan's rightly most-respected Murdochian aficionado. He set to work on me immediately: less than 6 months after arrival I had fallen in love not only with Japan, but also with Iris Murdoch's beautifully written, moving, and sharply observed fictions and agile stand-alone philosophical musings. I stood in awe of this wonderful writer and her gargantuan store of knowledge and ideas, and I still do.

In the autumn of that same year, Murdoch and her husband John Bayley (a literary critic whose work I had loved and admired for its clarity and incisiveness since undergraduate days) came to Japan on a British Council visit, her last trip to Japan, a country she clearly adored. Professor Muroya and I chaperoned the couple in Okayama and Kyoto. They were absolutely charming, much more interested in quizzing me about my own creative writing than answering my inane questions about theirs. They asked me to send them some of my own poetry. I did so and, as a direct result of their recommendation, my first humble poetic efforts were published in the prestigious *Agenda* poetry journal, which led to a book contract and the first of what has become half a dozen volumes of verse I have published in the UK.

Professor Muroya and I went on to edit and publish, with her gracious approval, the only available international collection of Murdoch's own (rather good) *Poems*, and a companion selection of her *Occasional Essays*. I subsequently met Dame Iris and John on a couple of occasions in Oxford, and I would like to think that we built a rapport and even became friends. They were special persons: inimitable originals, unique. The last time I met them, Iris was already wrestling with the tightening grip of the onset of Alzheimer's. And she knew that too. We were chatting, and she suddenly stopped midsentence and grasped my hand so tightly. 'I'm sailing away, aren't I?' she said, with a look of sadness and fear in her beautiful Irish eyes. I told her she was not, and I wished that she wasn't, but she was.

I am still a poetry person, but that doesn't prevent me enjoying Murdoch, and, somehow, I do not feel myself to be an impostor here. There is a breathtaking undertow of poeticism in all Murdoch's prose: in the maxims, aphorisms, wit, rhythms, and images that uplift her narratives and make her sentences bristle and ripple and flow with a compelling energy and a beautiful ease. And Murdoch knew it. At a garden party at the home of a mutual friend and Bronte scholar Professor Christopher Heywood, I told that most enigmatic and engaging lady that I found her novel *The Sea*, *The Sea* heavily

symbolic. She replied with a dissembling charm as cutting as it was graceful that, 'Well, of course it is. All my writing is symbolic!' So I feel at home here. I have loved being a member of this worthy and convivial society since its inception, and I will be honoured and delighted to become its president, to do my best to keep the ship steady and well organised. I have no confidence at all in my ability to do so, but, with your help and patience, we'll sail to somewhere good, and not sail away.

会長退任挨拶

塩 田 勉

多忙の中、本学会のために、力を尽くしてくださった室谷、平井両氏の貢献のあと、諸般の事情から、やむを得ず、つなぎ会長を努める巡り会わせになりました。みなさんのご親切とご協力を得て、なんとか、退任までこぎつけられそうで、嬉しく思います。

在任中、事務局長の岡野さんから、並々ならぬ サポートをいただき、それがなければ、日々に老 いて劣化していく記憶力に悩むわたしは、とても 責任を果たせなかったのではないか、と思いま す。いつも迅速で、有能で、優しい事務局長さ ん、ありがとうございました。また、細かい問題を、メールで送りつけてご相談いただいた理事の方々も、まめに回答や意見を寄せて下さり、とても気持よく、やりやすかったと思います。後任を引き受けてくださったハラさんも、なにくれとなく、メールをくださって、仕事をやりやすくする配慮をしてくださいました。「みんな、いい人だね、この学会は!」というのが、辞任させていただくわたしの、いつわらぬ感想です。ありがとうございました。

第 17 回大会報告記

大 道 千 穂

第17回日本アイリス・マードック学会は、2015年11月21日(土)に青山学院大学(東京都)で開催された。美しく色づいたキャンパスの銀杏の葉が青空に映える秋晴れの一日となった。午後12時30分から総会があり、塩田勉会長から研究発表者、参加者への感謝と新会員の方々への歓迎の辞があった。第17回目にして初めて海外からの発表者をお迎えし、会場はいつにもまして華やかな雰囲気に包まれていた。

次に井上澄子副会長から午前中に開かれた理事会の報告があった。報告内容は以下の三点である。第一に、来年度の開催校は愛媛の四国学院大学あるいは東京の明治学院大学、開催日は未定だ

が10月が望ましいということになった。第二に、2016年1月1日から塩田先生の任期満了に伴いポール・ハラ先生が会長に就任されることが決まった。任期は二年である。第三に、現理事である榎本眞理子先生、高橋和久先生に代わり大槻美春先生、中西ウェンディ先生が理事になられ、大槻美春先生、大道の代わりに内藤亨代先生、中窪靖先生が監事になられることが決まった。

事務局からは、任期を終えられる塩田会長に対する謝意が伝えられた後、住所変更などについてはすみやかな連絡をしてほしいとの依頼があった。来年の学会の企画について提案などがあれば事務局に知らせてほしいとの依頼もなされた。

会計担当者から2014年の収支決算報告、ならび に2015年の予算案、中間報告があり、了承され た。また、5000円の賛助金を寄せてくださった新 入会員の有馬弥子氏に感謝の意が表された。

発表は全部で5本あった。中西ウェンディ 先生のご発表、'The Insider Outsider in Iris Murdoch's Bruno's Dream and Kazuo Ishiguro's The Remain of the Day' は、アイルランドに生 まれイギリスに育ったマードックと、日本に生ま れイギリスに育ったイシグロがともに持つ自らの アイデンティティに対する複雑な思いが、ブルー ノとスティーヴンズという共通項の多いキャラク ターを生み出したことを鮮やかに分析するもので あった。インサイダーでありながらアウトサイ ダーであるという立場の孤独と希望を追求したご 発表は聴衆の心を強く惹きつけた。

アメリカ、特にアジア系アメリカ文学に造詣が深い有馬弥子先生によるご発表、「ディアスポラとしてのジャクソンがもたらす攪乱と解放」は、ジャクソンとは誰なのかという出版当初からの議論に新たな視点を加えるグローバルな大きさをもったご発表だった。ジャクソンの中に南アジア系ディアスポラの特性を見出す有馬先生の視点にこの小説の新たな可能性を発見する貴重な体験となった。

『ケルズの書』からの繊細で鮮やかな図像の数々を散りばめたスライドを使われての井上澄子先生のご発表、「The Book and the Brotherhoodに描かれる連続性について」は圧倒的な美しさで聴衆を虜にした。この小説の"The Book"を聖書と解釈された先生は、小説内にで執拗に登場する渦巻き、螺旋のイメージを拾い出し、この小説の一見きわめて俗世的なストーリーが、実は『ケルズの書』の宇宙観の表現であることを証明された。マードックの作品が、大胆な実験性と果てしない広がりを持つ『ユリシーズ』にも似た物語であることが紐解かれていく興奮に満ちた時間であった。ジョイスもまた、『ケルズの書』に強く惹かれていた作家の一人であったということだ。

哲学をご専門にされているエスター・モンテレオーネ先生のご発表、'Iris Murdoch and the Women Philosophers of Oxford' は、マードック

の哲学を20世紀後半のオックスフォードを拠点とする女性哲学者たちの思想史の中に位置づけようとするものであった。先生のご説明により、私たちはマードックの思想が精神生活を重要視する点において同時代に主流であった論理実証主義とは一線を画すものであり、そのスタンスが彼女の時代にオックスフォード大学で活躍した多くの女性哲学者たちと共通することを私たちは理解した。「個」「善」「徳」という三つのキーワードと、こうしたキーワードを包み込む宗教という領域のマードック哲学における重要性が示されたことで、聴衆は改めてマードックの小説が彼女の哲学と密接に絡み合い、結びついていることを確認した。

研究発表はフィオナ・トムキンソン先生による 'Are Iris Murdoch's foxes Japanese? Kitsuné myth and Zen Buddhism in *The Philosopher's Pupil* and *The Message to the Planet* で締めくくられた。マードックも知っていたかもしれないという12世紀日本の狐に関する伝承と、彼女の2作の小説に現われる狐や狐の比喩の類似性を指摘しながら丁寧に構築された議論は、マードックのみならず、外国人研究者の日本への深い関心を確信させてくれた。総じてイングランドの知的中心地に腰を据えて創作活動を続けたマードックが、いかにグローバルな視野を持っていたかを再確認させられる学会となった。

学会の最後を飾ったのは野中涼先生による特別 講演、「アイリス・マードックの衝撃」であった。 戦後日本において若者たちが心の渇きを潤すよう に外国の小説にのめりこんでいった様子、そうし た青年たちの一人であった先生ご自身の小説への 思いが、報告者の目には映画かドラマをみている ように映し出された。1970年代生まれの報告者 は、日本人の活字離れがメディアの関心すら呼ば なくなるほど当たり前になってから生まれた世代 だ。先生が紡がれるお話は異世界のものであり、 惹きこまれた。人間の「善」を信じそれを説く マードックを読むに至るまでの、戦争を経験した ものであるが故の葛藤、読んでみて受けた衝撃、 そして途方もない想像力が生み出すありえないプ ロットに対するちょっとした失望と、現実の些細 なものの価値を認めるモダニズム小説への関心の 転化。どれも貴重なお話であった。

学会終了後、大学横のアイビーホール (青学会館) にて懇親会が行われた。野中先生、そして海外からいらした発表者お二人のご参加を得ること

もでき、英語と日本語が入り混じる約2時間の楽 しいひとときがもたれた。開催校委員を引き受け るのは初めてで、至らないところも多々あったと 思う。皆様方のあたたかなご協力に感謝したい。

特別講演要約

アイリス・マードックの衝撃

野 中 涼

私がマードックの小説に奇妙な衝撃を受けたのは1960年代の終わり頃です。当時高く評価されていたモダニズムの作品とちがって、風変わりな人物がたくさん登場することに驚きましたが、語り手がたえず何かを誤解するために、物語が次つぎ思いがけない方向へ展開して、おそろしく複雑に錯綜する状況が生みだされることにも驚きました。

たとえば『網のなか』のジェイクは、パリ祭の 群衆に恋人の姿を見かけて追いかけ、追いつき、 声をかけると、それがまったく別人だったと知っ て唖然とする。ベストセラーを狙うだけの凡作と 思いながら英訳してやっていたフランス人作家 が、あるときゴンクール賞をもらったと知って、 大変なショックを受ける。そういう思いちがい、 思いこみ、思いすごしの誤解の場面が、あまりに 多かったのです。

しかも彼女の語り口は、しばしば読者を瞬間的に誤解させ、戸惑わせて、微笑をさそう。『鐘』のドーラは、混みあった汽車の中で、老婦人が立っているのを見ると「席は絶対ゆずらないわ」と決心したとたんに、さっと立ちあがって、「どうぞ、ここにお座りください。私はすぐ降りますので」と笑顔で言う。『ブラック・プリンス』の主人公は冒頭で、旅支度をととのえ、さあタクシーを呼ぼうとすると、座って少し考えてみたくなってしまって、「こういう癖をロシア人は一つの慣習だなんて得意がっているそうだ」とつぶやきます。語りの戸惑いとも呼びたいこの癖は、似

た例にドストエフスキーの癖がすぐ思い浮かびま すが、そこに影響関係があると示唆したのかどう かはわかりません。

さらに人物たちの行動に常軌を逸している場合が多い。『海よ、海』のチャールズ・アロビーなどは、ストーカーのように人妻を待ち伏せしたり、台所の窓をこじ開けて侵入したり、ついには拉致監禁までする。この厚かましい振る舞いはまた『源氏物語』に似ていて、光源氏もよくまあ途方もないことを平然とやってのけるなと思うところがありますから、影響関係というより、かなり大胆不敵な想像力のふてぶてしさをどちらも共通に備えていた、と推定してみたくなります。

ところでマードックは、サルトル論や倫理哲学の論考で、現実の複雑性、偶然性、還元不可能性にもっと留意して表現すべきだ、と主張していました。これもモダニズム心酔者には一つの新鮮な衝撃でした。彼女は人物たちに誤解の紆余曲折をたどらせることで、いかにも自然に現実の混沌を描きだし、ユーモラスだったり、怪奇的だったり、神秘的だったりする物語性豊かなフィクションの創作を可能にしていたわけです。

しかし威勢のいい論考の批判文には、いくぶん性急な思いすごしの誤解がありはしなかったか、という気が私などはしています。サルトルは現実の還元不可能性を許せないので「現実は敵だ、他者とは地獄だ、などと言う」とにがにがしく指摘するけれども、彼の想像力論が認識作用のメカニズムの限界を真剣に論究していたこと

にはなぜ目をつぶったのか。ケインズやムーアの 'Sincerity'をロマンティシズムのあやまちだと否定するけれども、彼女が敬意をもって肯定するシモーヌ・ヴェイユの 'Attention'とどこがどう違うと言えるのか。プラトンの洞窟の比喩や、ピュロンの判断中止の懐疑主義以来、人間は現実

を正確に認識できないというペシミズムが、ヨーロッパの思想史に長く一貫して継承されてきた重要な主題であるのを考えると、彼女の'Good'や'Perfection'の理念はその系譜のうちのどこにどう位置づけられるものなのか。

研究発表要約

The 'Insider Outsider' in Iris Murdoch's Bruno's Dream and Kazuo Ishiguro's The Remains of the Day

Wendy Jones Nakanishi

This article compares two novels whose theme is the reflections and regrets of a lonely male protagonist. In *Bruno's Dream* (1969), it is Bruno, a sick old man nearing death. In *The Remains of the Day* (1990), it is the butler Stevens who, preoccupied with his work, has always kept to himself and now discovers a longing to establish human contact with others. Both are depicted as essentially alone. In the drama of life they are spectators rather than actors. They are 'insider outsiders'.

The sense of alienation Bruno and Stevens experience is so acutely described because they are the creation of authors who were 'insider outsiders' themselves: inhabiting England but not native to it. Iris Murdoch was born in Ireland and taken to England as a baby. Kazuo Ishiguro was born in Japan but has lived in Britain since he was six years old.

Ishiguro has often admitted impatience with critics who try to identify him as a Japanese writer simply because he was born in Japan. At the same time, he has claimed that in *The Remains of the Day* he could write as an author 'more English than English,' able to produce a pastiche portrait of a 'mythic England' because of the 'ironic distance' he knew existed between him and native Englishmen.

Similarly, it has been suggested that Murdoch also straddled two cultural heritages as an Anglo-Irish writer: 'a people with a dual identity, seeing themselves in some sense as both the true Irish *and* the true English, while being regarded as neither, and as outsiders'. Nationality was a sensitive issue for Murdoch. She set two of her novels of the '60s in Ireland and always professed herself proud to be Irish. But many thought Murdoch had no more valid claim to Irish nationality than Americans who had migrated from Ireland centuries earlier. It may be that it is how Murdoch thought of herself that is important.

In writing *The Remains of the Day* Ishiguro has said he made a conscious decision to do a book set outside Japan because he wanted to be a writer who tackled universal

themes, not just Japanese subjects although, ironically, in Stevens he depicts a character who bears many hallmarks of a Japanese. When she was writing *Bruno's Web*, Murdoch was mired in unhappiness and futile regrets and wished to transcend her own rat-runs of memory by depicting a character saved by love. Murdoch and Ishiguro may have felt real life 'insider outsiders' in England, but in two of their most memorable protagonists, Bruno and Stevens, they depict fictional 'insider outsiders' capable of being released from the prison of self to the wider community of the world, awakening to life's potentialities through acceding to the demands of love.

研究発表要約

ディアスポラとしてのジャクソンがもたらす撹乱と解放

有 馬 弥 子

マードックがアルツハイマーと闘いながら完成 した絶筆『ジャクソンのジレンマ』の解釈におい て、ジャクソンの役割、人物造形、さらにジャク ソン自身の内面にどう踏み込み分析するかが核心 である。作者は、タイトルにおいて既にジャクソ ンの存在のみならず、彼のジレンマという立ち 入った内面さえも提示している。しかし物語展開 ではまず、あたかもジャクソンよりはそれぞれの 屋敷の所有者エドワードやベネットの二人、及び 二人をとりまく人々の人間関係が物語の主軸であ るかのようなプロットを前面に出している。中盤 では、二軒の屋敷ハッテイングとペンディーンの 所有者たちと周囲の人々の過去、現在、未来が 様々に交錯する要所要所で、ジャクソンの存在と 言動がプロットを展開させている。最終的に物語 終盤ではジャクソンが主体として提示され、一人 牧草地にたたずむジャクソンの思考の叙述で結ば れる。

この最終場面で読者は、ジャクソンが何者であるかという問いに対する答、すなわちその答は存在しないという答と対峙する。このような幕引きと、第一章でベネットと既に死去している伯父のティムがアイデンティティーについて語り合う場面で論じる実存的真実のテーマとが共鳴する。すなわち、個々人は確固たるアイデンティティーに

安住することはできないのであり、誰しもが何者でもないという哲学である。ジャクソンの存在を通じ人々がこのような認識を迫られる時、人々の内面に引き起こされるものは苦悩でもあり歓喜でもある。なぜなら、人物らがそれまでしがみついていたアイデンティティーは、安心のもとでもあると同時に傲慢さや破ることのできない暗い殻など負の側面と無縁ではなく、それらからの移動、解放により人々は先へ歩み始めるからである。

出自が明かされることのないジャクソンのアイ デンティティーはディアスポラのそれである。他 の人物たちはディアスポラとしてのジャクソンと は対比しているかのような構成で登場する。しか し、一見ジャクソンとは対照的な確立したアイデ ンティティーを持つかのようでもある多くの英国 籍の他の登場人物たちにとってのアイデンティ ティーの揺らぎや哲学的真実が、ジャクソンの ディアスポラ性との交錯によって次々と導き出さ れていく。その過程は不安をも伴うが、第一章の ティム伯父のアイデンティティーについての講釈 にある言葉を借りれば「恩寵 | をももたらす。本 篇を結ぶ最終センテンスにはジャクソンは「微笑 みを浮かべた」とある。その微笑みはあくまでも ディアスポラとしてのそれであり、神秘的であ る。その複雑さの意義を重層的に分析することに

より、ジャクソンが登場人物らにもたらすものは 何なのかが明らかになる。

ジャクソンの特性はまさに単一的な固定したアイデンティティーをもたないことと、ジレンマを内包し続けることとにある。その動的で流動的なアイデンティティーによりジャクソンは、可変性、流動性を失った固定的な関係において生じがちな膠着的な差異、上下関係、差別関係、あるいは停滞した思考や状況を攪乱し活性化させ、人々を自由な発想に導き解放する。ジャクソンは人々の心の解放をもたらす触媒的な役割を担っているのである。ジャクソンにより攪乱され解放される人々の喜劇とも悲劇ともつかない展開をこのよう

に読み解くと、ジャクソンによりもたらされる解放は、人々の自己の内側でうごめき他者を束縛し傷つけるエゴ、自我への執着からの解放を示唆する例のようにも読める。

本作品がマードックがアルツハイマーを患う苦しみの中で書かれたこと、ジャクソンが生と死の境をさまようかのような結末さえ提示されていること、これらは、ディアスポラの、境界を曖昧にし境界を崩す破壊性と恵みが、生と死の境さえも曖昧にしてしまうことに対するマードックにとっての恐怖、およびマードックがそこに感じていたかもしれない恩寵を意味しているのかもしれない。

研究発表要約

The Book and the Brotherhood に描かれる連続性について

井 上 澄 子

表題の 'the Book' は '聖書' を暗示し、'the Brotherhood' は 'Monastic brotherhood'、つまり「写本などの創作に従事した修道士の仲間たち」の含意があることに気付く。本来、Oxbridgeが College から成る形になっているのは、大学が中世の修道院から派生して、聖職者の養成を目的としていた伝統があるからで、Fellowのレヴクィストが妻帯せず、学寮に住み続けていたことや、学友フィールドが卒業後、修道士になったと述べているので、作者の意図が読み取れる。

オックスフォード大学の創立記念ダンス・パーティで、インテリ群像が踊るダンスの輪は、いくつもの渦巻を形成しながら、それぞれの渦巻の中心には、クリモンドとジィーン、またジェラードとローズが核となっていて、その中心には「愛」と「友情」がある。渦巻は旋回を続けるが、偶発的な要因で反転して次の新たな渦巻へと連続して永遠に旋回を続ける。作中で、whirl、circle、scroll、spiral、screw など「渦巻」の類語が多用されている。人生という舞台で、クリモン

ドの「本」を巡り結成された後援会の仲間たちの描く友愛の渦巻は、聖書写本『ケルズの書』のカーペット・ページの場合と同様に、単体ではなく、必ず複数で表現されている。例えば、中心にはジェラードが居て、彼を取り巻くシンクレア、ジェンキン、ダンカンなどが、同性愛の色調を伴って描かれ、それぞれが主役ともなり、入れ子状に渦巻を形成する。同性愛のテーマは、アングロ・アイリッシュの出自と、『ケルズの書』のルカ伝福音書冒頭のページの挿絵をほうふつさせながら提示される。

またボイアーズ館に集う仲間のうち、リリーとジェラード、ローズとジェラードがワルツ曲に合わせて氷上のスケートで渦巻を描いて滑る。そこにファーザー・マックアリスターが偶発的にスケートしながら登場すると、ローズは反転してその渦巻に合流し、次の渦巻へと連続してゆくというふうに、人間関係は果てしなく捻り合わされて、あたかも人間組紐文様の様相を見せて描かれる。一人の主役によるのではなく、多数の登場人

物それぞれが主役となり、描出される図式に注目すると、人間関係の渦巻の連鎖が螺旋、組紐など 聖書写本『ケルズの書』の抽象文様の世界をストーリーの運びによって描出しようとする、マードックの技法が読み取れる。

かつてジョイスは『フィネガンズ・ウェイク』で実験的言語を駆使して『ケルズの書』の宇宙のイメージを表現しようと試みた。ジョイスとはたがいに、きわめて異質の作家であるマードックは、渦巻状をなす抽象的な形象の絡まり合いが、次第に中心を移動させつつ連続してゆく世界の秩序をストーリーによって表現することを試みたと考察される。

マードックは「連続性」の概念を次のように表現している。ローズはジェラードへの「憧憬と愛」において善意の人であり、連続性の世界の住人であると述べ、一方ジィーンは、クリモンドと共に連続性の世界の外側の偶発性をはらんだ実世界に生きているという。

かねてマードックは絵画など芸術作品を援用 して作品のメッセージを提示するのだが、本作 品ではマチスの絵画『ダンス』(Succession)のメ

タファーによって「連続性」を象徴した。またク リモンドをヒンドゥー教のナタラージャ(踊るシ ヴァ神)で象徴しようとしたものは、ヒンドゥー 教の重要な特徴である「宗教的寛容の精神」であ ろう。ティマーがダンカンとの偶発的な愛の衝動 の結果、被った精神的打撃により、「古い神」へ の信仰の喪失を体験したが、キルケゴールや、サ ン・ファン・デラ・クルスを読み、次第に救われ てゆくプロセスを描いて、マードックは他者認識 を可能にする「寛容」の精神が小説論の基本にあ ることを表明している。この作品中に『ケルズの 書』の intertextuality は随所に散見できるが、『ケ ルズの書復刻版』の序文で U. エーコが、「未完 の書であるが今後も連続して書き続けることが期 待される哲学的大作の典型」であると述べたよう に、本作品でもジェラードとクリモンドが「現代 の善と魂」に関する思索の書を、今後も連続して 書き続けるだろうとの予感を提示して、小説はこ こで閉じている。

本作品は、同性婚や宗教的寛容の精神など、時代の抱えている問題を先取りしながら、それを超える普遍的な世界観を提示している。

研究発表要約

IRIS MURDOCH AND THE WOMEN PHILOSOPHERS AT OXFORD

Ester Monteleone

In the nineteen forties «there was a remarkable generation of women philosophers»: their work «was distinguished both for their deep moral seriousness and by a willingness to engage with real-world problems, going beyond the narrow limits which linguistic philosophy had set for itself. This work remained true to the spirit of Wittgenstein's quest to free philosophy from the paralysing effect of 'systems'». This is how Mary Midgley describes the Oxford of the first half of the twentieth century, highlighting the crucial role played by some thinkers in order to free philosophy from the paralysing effects of logical positivism. Refusing universal knowledge, opposing totalitarian, unifying *logos*, stepping back from the model of rationality that had dominated the western philosophical tradition, Elizabeth Anscombe, Iris Murdoch, Philippa Foot, Mary Midgley, Mary Warnock found

themselves united by the common denominator of their aim to oppose logical positivism and "rediscover the virtue".

If this is the general framework, it is highly significant to focus on three theoretical threads intertwined in Iris Murdoch's work, the *individual*, *Good* and *virtue*: the Philosopher considers how the subject, through the exercise of virtue in daily life, establishes a relationship with the Good, understood in a Platonistic way as impersonal and transcendent.

Distancing herself from Behaviourism, Murdoch's first step is that of demonstrating the existence of the inner life: seeking to provide a realistic image of the *individual*, Murdoch asserts that the subject is selfish by nature, his psyche is characterized by a relentless system continuously devoted to taking care of its own interests. Not only must ethics relate to the whole individual, but it must also possess *virtue* as its central pivot: virtue is the only one that "pierces the veil" of the subject's selfishness, so that he may have a relationship with reality and may perceive the Good as transcendent. Finally, retrieving the ontological proof of Anselm, Murdoch demonstrates that nothing is more important in philosophy and theology than the idea of Good.

Within the present-day debate, Iris Murdoch, like Paul Ricoeur, defends the theory that ethics should not be confined to the sphere of the normative dimension. For her, ethics is not primarily a theory of duty; it is, rather, a theory of the knowledge of reality: an ethical life depends on how we view reality, things and others. Murdoch, in a preliminary way, invites us to test the pertinence of our pre-comprehensions and prejudices (which we often assume in an a-critical manner from the current ēthos): only in this way can we reach the most correct level of knowledge possible, which corresponds to the reality of facts, and which is capable of orienting our moral behaviour.

研究発表要約

Are Iris Murdoch's foxes Japanese? Kitsuné myth and Zen Buddhism in The Philosopher's Pupil and The Message to the Planet

Fiona Tomkinson

This paper advances the hypothesis that Iris Murdoch was making use of Japanese kitsuné myth in her references to foxes in *The Philosopher's Pupil*, *The Message to the Planet*, *The Book and the Brotherhood* and perhaps also, more fleetingly, in earlier works such as *Henry and Cato* and *The Black Prince*.

The Philosopher's Pupil, like a number of Murdoch's novels, makes a number of references to Japan: Stella's father in Tokyo has given her a *netsuke* collection; Rozanov has a Japanese doctor; there is a Japanese vase in the Slipper House. The novel is

also haunted by foxes and their mysterious and sometimes sinister presence in the garden of Bellmain is associated with the appearance of a female ghost in a gingko tree and culminates in a violent confrontation between Alex and her servant Ruby, who, superstitious about the foxes, has arranged for them to be gassed; they are however reprieved due to the incompetence of the local council in their attempt to eradicate them.

I argue that the apparently distinct threads of the fox theme and the Japanese theme in the novel are connected. Firstly, through the archetype of the lost fox-mother of *kitsuné* myth which Murdoch might have encountered through Junichirô Tanizachi's 'Arrowroot' and which is instantiated in Tom McCaffrey's vision of his dead mother. Secondly, though another story of reprieved foxes in a 12th-century Japanese folktale which Murdoch would have had access to through the version of Royall Tyler: that of the householder, Yasumichi, who is determined to eradicate the mischievous foxes in his house, but who relents after the fox patriarch appears to him in a dream.

The connection between the fox and Japanese spirituality is reinforced in *A Message to the Planet*, another fox-haunted novel, in which I believe Murdoch is referencing the wild fox koan of *The Gateless Gate (Mumonkan)*: Marcus Vallar is described both as someone who 'is a koan' and who dies the 'death of a fox' (he in fact attempts to gas himself as the foxes in *The Philosopher's Pupil* would have been gassed.) One philosophical aspect of this koan is whether one should deny the power of causality; I believe it is no coincidence that both the novels discussed here end with deaths with ambiguous causes, and in the case of Vallar with the question as to whether his death was completely out of the realm of ordinary physical causation.

Finally, I argue that in *The Message to the Planet* and *The Book and the Brotherhood* we have references to the Edo legend of the evil nine-tailed fox, Tamamo-no-mae, and that the standing stones in these novels can be seen as *sesshoseki*, or Japanese foxes in disguise.

寄稿欄

室谷洋三先生、瑞宝中綬章受賞

塩 田 勉

ある日、岡山の「なかさんげ囲碁サロン」事務局の佐藤真希という方から、室谷洋三先生が、長年のマードック研究に対して、瑞宝中綬章を授与されたので、お知らせしたいというニュースをいただいた。そういってはなんだが、妙なところから知らせが来たもんだ、と思いながら、大きな封筒をのぞくと、受賞のニュースを載せた4月29日

の『山陽新聞』と、写真が同封されていた。

『山陽新聞』の「岡山市民版」をみると、受賞者たちのトップに室谷先生が、「人間愛を訴えた現代英国の代表作家アイリス・マードックさん(1999年没)の研究に没頭。精神的自由の獲得をテーマにした論文を日英両国で出版し、98年には国内研究者による学会を立ち上げた。(以下

略)」、と紹介されている。なんでまた、囲碁サロンから、こんなものを送ってきたんだろうと、ネットで調べると、こんなことが書いてあった。(「なかさんげ囲碁サロン」HP、http://www.igo.satocamera.com/index.php?FrontPage)

室谷先生は、日本棋院岡山県支部連合会の会長さんだった。ある日、いつも写真のプリントを頼む、サトウカメラに出かけた室谷さんは、そこの主人佐藤さんとおしゃべりをした。佐藤さんは、ギターが好きで、なんと室谷さん(「先生」ではなく「さん」付けでおよびすることをお許しください)も、ピアノのレッスンを始めていたところだったので話が合い、そこのビルに空き部屋をもっていた佐藤さんに、遊んでいる部屋を囲碁サロンに変えてみませんか、と持ちかけた。佐藤さんは、室谷さんに碁の手ほどきを受けて、面白さを知り、すぐにこの話に乗った。

室谷さんは、東京大学岡山囲碁同好会から碁石を調達し、日本棋院からも援助を仰ぎ、サロンの開所に漕ぎ着けた。それだけなら、学者の道楽に見えるが、室谷さんは、そのサロンを、子供学習クラブ(囲碁、英語、数学)、女性サロン(休憩と喫茶)、男性サロン(一般碁対局)と三部に組織し、そこで、お茶のお点前、ギター演奏、英語会話などの集会所とし、周囲の知人、同僚、同好会メンバーなどに声をかけ、憩いの場所に育て上げた。一般企業で営業だの、売り込みなどやらせたら、室谷さんは、すぐに重役になれるような商才の持主だったのである。

マードック学会もそうだが、室谷さんは、NHK朝ドラの「あさが来た」に出てくるあさちゃんみたいに、関西系のど根性と、人情の機微をついた経営の上手なお人だったのである。だから、室谷さんが受賞されたというニュースは、阪神が優勝した地元だの、梶田隆章さんや大村智さんなどノーベル賞受賞者を出した埼玉や山梨の地元のように、湧き立ったに違いない。

室谷さんの、ゼロからコミュニティーを立ち上げ、人材と資金を集め、経営する才能は、日本アイリス・マードック学会設立にも遺憾なく発揮された。その点については、会員のみなさんが知るとおりであるので詳しくは語らない。しかし、同時に、研究者個人としても、おびただしい業績を残されている。学会員との共著も多い。(CiNii<http://www.sf.airnet.ne.jp/ts/filter/kyujitai.cgi?url=ci.nii.ac.jp/author/DA00574269>)

なんもせずに、碌々と馬齢を重ねてきた私なん ぞは、へー、と感心して呆れてしまうような内容 と量である。

日本におけるアイリス・マードック研究に先鞭を付けられ、マードックの日本訪問や、日本文化に対する関心を深める上でも、わたしたちの知らない貢献をされてきた室谷さんが顕彰されたことは、当学会にとっても喜ばしいかぎりである。この場をお借りして、お祝いを申し上げると同時に、みなさんにもお伝えする次第。室谷先生、これからは、お互い、ボケと老化との闘いでっせ。がんばりまっしょ。

事務局からのお知らせ

第18回大会について

第18回大会は2016年秋に四国学院大学で開催予定です。日程が決まり次第学会員の皆様にはご連絡いたします。

研究発表、特別講演、懇親会などを計画してい ます。

研究発表については以下の要領で発表者を募集 いたしますのでご応募くださるようお願いいたし ます。

マードック本人に限らず、マードックと同時代の作家、思想的な類似性をもつ作家、マードックが関心を寄せていた作家、マードックに影響されたと思われる作家などに関する研究発表も受け付けます。発表テーマに発表要旨(日本語の場合は1200字程度、英語の場合は400 words 程度)を添えてお申込みください。

応募資格:日本アイリス・マードック学会会員

発表時間:発表25分、質疑応答5分

締切日:2016年6月末日

申し込み:氏名、所属、住所、電話を明記して

〒347-8504 加須市水深大立野2000 平成国際大学 岡野浩史研究室内 日本アイリス・マードック学会事務局 まで

会計報告 2014年度会計報告

(2014年1月1日~2014年12月31日) (単位:円) 収入の部

D C > 111-	
前年度繰越金	335,606
年会費	154,000
賛助金	20,000
合計	509,606
支出の部	
事業費	
ニューズレター印刷費	38,000
ニューズレター送料	
(印刷会社よりの発送費)	1,000
研究発表会・総会運営費	37,587
内訳 特別講師講演料	20,000
特別講師交通費	3.000

学生アルバイト

茶菓

管理・通信費

ニューズレター郵送料	5,340
はがき代	3,744
振込料金	840
通信費 (会長分)	5,118
ホームページサーバー使用料 (手数料を含む)	6,711
ホームページドメイン代(手数料を含む)	4,449
ホームページ更新料	18,000
懇親会補填分 (特別講師分)	6,500
合計	127,289
差引残高	382,317

原稿募集

マードックの人物像や作品の研究に纏わる新発見・苦労話・未公開の写真や資料などの原稿を募集致します。肩の凝らない内容で結構です。ふるってご投稿くださいますようお願いします。

本 文:1600字程度、MS ワードで作成をお願 いいたします。(手書き原稿も受け付

けます。)

締切り:2016年10月31日 送 先:斎藤佳代子宛

kayo_aqua@oregano.ocn.ne.jp

または 〒216-0003

川崎市宮前区有馬8-19-4

編集後記

ニューズレター第17号をお届けいたします。すばらしい原稿をお寄せくださいました先生方をはじめ、多くの先生方のご協力をいただきましたことを厚くお礼申し上げます。初めてのニューズレター編集で、行き届かない点も多々あったかと思いますが、ご容赦いただければ幸いでございます。

今後も、ニューズレターへのご協力を、よろし くお願いいたします。

12,000

2,587

日本アイリス・マードック学会役員名簿

会 長 Paul Hullah (明治学院大学)

副会長 井上澄子 (千里金蘭大学·名誉教授)

理 事 井上澄子 (千里金蘭大学・名誉教授)・

井内雄四郎(早稲田大学・名誉教授)・

大槻美春 (千葉大学非常勤講師)

大道千穂(青山学院大学)·岡野浩史 (平成国際大学)·塩田勉(早稲田大学・ 名誉教授)·平井杏子(昭和女子大学)·

Paul Hullah (明治学院大学)

監 事 中窪靖(京都文教大学)

内藤亨代

事務局 岡野浩史(平成国際大学)

会 計 岡野浩史(平成国際大学)

マードック学会ホームページアドレス

http://irismurdochjapan.jp/jp/

The Iris Murdoch Newsletter of Japan No.17

発行者 日本アイリス・マードック学会

会 長 Paul Hullah

編 集 斎藤佳代子

事務局 平成国際大学 岡野浩史研究室

〒 347-8504 加須市水深大立野 2000 Tel. 0480-66-2100 Fax. 0480-65-2101

e-mail: okano@hiu.ac.jp